

食事場面からみる児童養護施設の施設形態に関する基礎的研究

児童養護施設 施設形態 食事場面  
 参与調査 会話 定性データ

正会員 ○石垣 文\*1  
 同 小野田泰明\*2  
 同 坂口 大洋\*3

1. 研究の背景と目的

近年の児童養護施設においては、生活集団の小規模化や地域への施設展開が志向されている。それに伴い、大舎や小舎といった施設形態、また生活空間のあり方が問われつつある。一方、児童の生活における食事場面を考えると、それは身体的な意味のみならず、精神的な側面や集団の関係構築、さらには教育的な指導の場といった多様な意味合いを有する場面である(文1) と言えよう。そこで本研究では、施設形態ごとの食事場面の実態を把握し、その特徴を明らかにするとともに、今後の研究の指針を得ることを目的とする。

2. 研究の概要

ここでは事例的に、大舎制A園、小舎制ユニットB園、小舎制グループホーム(以下、GHと略す)Cホームを対象に調査を行った(表1)。食事場面への参与調査では、調査員は積極的な働きかけは行わずに、会話や食事の状況をフィールドノーツにまとめた。分析において会話は定性データ(文2)として扱う。具体的には「会話の内容が指し示す範囲」という視点からデータを切片化し、意味内容が類似したデータをカテゴリー化し、得られたカテゴリーを更にグループに分けるという作業を繰り返し行った。

3. 食事環境の実態

食事は、A園は「集団給食」の形式がとられ、B園とCホームでは生活グループごとに分かれてとられる(図1)。また調理は、A園では調理員が中心に行われ、B園、Cホームでは保育士や児童指導員と児童が進められている。夕食の平

表1. 調査対象施設および調査の概要 註1)

		大舎制	小舎制ユニット	小舎制GH
施設概要	施設名	A園	B園	Cホーム
	構造	RC造	RC造	木造
	延べ床面積	1,817㎡	3,341㎡	107㎡
	児童定員	86名(GH含む)	83名(GH含む)	6名
調査対象グループ	生活グループ数	6	11	1
	人数	12名	7名	6名
	年齢	年長~高3	年少~中2	年少~中3
	在所期間	平均58ヶ月 最短7ヶ月、 最長124ヶ月	平均55ヶ月 最短18ヶ月、 最長96ヶ月	平均43ヶ月 最短19ヶ月、 最長60ヶ月
職員	職員体制	通勤交替	通勤交替	住み込み
	人数	3名	6名	3名
	児童数対職員数	12:1 (夜間36:1)	7:1 (夜間15:1)	6:2 (夜間6:1)
	生活グループ延べ床面積	191㎡	225㎡	107㎡
調査概要	調査期間(予備調査含む)	2007年7月	2005年10月~ 2006年3月	2005年10月~ 2006年3月
	参与調査期間	上記のうち計4日間 7時半~10時半、 16~20時	上記のうち計21日 17~20時	上記のうち計21日 17~20時
	職員連絡会への参加		○	○
	職員へのヒアリング	○	○	○

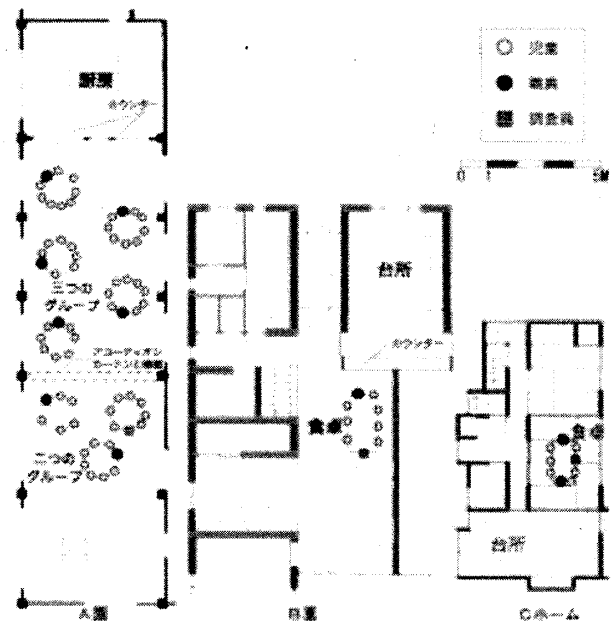
調査時現在

均時間はA園で25分、B園で40分、Cホームで50分と生活集団の規模が小さくなるほど食事時間が長くなっている。他方で、今回の調査からは確認できなかったが、A園では食堂の間仕切りによる分節化を試みており、それが食事時の児童の落ち着きに寄与しているとの意見が確認された。

4. 食事場面における会話

食事場面における会話内容を分析すると、大きくは表層的なものと同層的なもの二層に分けられた。

表層的な会話カテゴリーは五つに分けられ(表2)、そのうち「1.作法」と「2.健康と栄養」は3施設で共通に認められた。しかしその内容は、例えば作法において、A園では静かにどンドン食べることが、Cホームではゆっくり食べることがよしとされていた。食事をする事自体の位置付けが異なる



	A園	B園	Cホーム
調理する	調理員	保育士・児童指導員	保育士・児童指導員
児童の調理への参加	主に、長期休みに高齢児女子が参加	日常的に参加	日常的に参加
食卓の環境	68名の児童と、勤務中の職員が食堂に集まる。席は生活グループに基づいて固定。夏期以外は、間仕切りにより食堂は二つに仕切られる。(調査時は開放)	7名の児童と1名の職員による。席は固定。台所へ通じる扉は閉じられるが、ユニットの大きな物置は開き、また時おり児童の児童・職員がカウンターから声を掛ける。	6名の児童と1~3名の職員による。席は固定。台所や他の部屋へ通じる扉は閉じられる。
配膳	食卓の盛りつけられた皿を受け取り、トレーにのせて各自が自席まで運ぶ。	台所や食卓で個人のさらに盛りつけられ、また食卓には大皿がならぶこともある。	台所や食卓で個人のさらに盛りつけられ、また食卓には大皿がならぶ。
食事の開始方法	全体が二つに分けられ、各々で挨拶をする。選ばれた一人が「いただきます」を言う。	曜日毎に当番の児童が「いただきます」を言う。	職員が「いただきます」を言う。
夕食時間	平均25分	平均40分	平均50分

図1. 食事環境の比較

A study of the scale of the facilities through the eating settings at Residential care

ISHIGAKI Aya, ONODA Yasuaki,  
 SAKAGUCHI Taiyo

っていることが推測され、そのことが、食事時間の差ともなっていると考えられる。「3. 食事に関する思いの共有」や「5. 文化としての食事」は生活グループの規模が小さくなるほど、会話内容が多様になる傾向がみられる。

深層的な会話カテゴリは六つに分けられた(表3, 4, 5)。A園に比べ、B園とCホームでは会話の対象範囲や時制に多様性が確認され、さらに児童の将来像や家族のことが話題とされる時には、職員自身の家族やこれまでの経験が児童と共有されることが確認された。また、Cホームでは生活圏の話題への職員の対応から、児童の交遊関係を職員が把握していることが確認されたものの、B園では施設入所児ではない学校の友人を職員が把握していることは稀であった。更にCホームでの特徴として、児童が自らの身体的な特徴や悩みを話している点が指摘される。

5. まとめと考察

本研究を通じて、大舎制、小舎制ユニット、小舎制GHの食事場面の実態が記述され、またその特徴が把握された。被虐待問題などを抱え、児童への心理的ケアの重要性が強調される施設の現況を踏まえ、以下に考察を記す。①食事場面における会話は、そこに参加する集団の習慣が表れるもの(文1)であり、職員と児童の関係性の発露といった視点からも施設形態による相違が明確にされたと言える。②養育者からの適切な関わりが少なかった児童は、「身体感覚のくっきりした分化が遅れ、分化しきれていない混乱した感覚性をひきずる」(文3)ため、自己の身体的な状況(暑さ寒さ、快不快、疲れ等)に対して無頓着であるとされる。また、人との関係を結ぶのが難しい児童ほど、体調不調を訴えることで人とコミュニケーションを図ろうとする傾向が確認されている(註2)。そうした児童が多数を占める今日の施設において、自らの身体的な特徴や悩みについての会話が、GH入所児のみに認められた点は、児童の自己確認(文4)が認められると考えられ、注目に値する。③地域への施設展開が志向される今日にあって、職員による児童の施設外での活動や交遊関係の把握の度合いが食事場面の会話に反映されていることも示唆に富む。④今後は、本研究をもとに調査紙を作成し、対象を広げた調査を行うことで、施設環境に求められる要件を明らかにしていきたい。

なお、本研究の一部は平成18年度科学研究費萌芽研究(課題番号18656168)の補助を受けたものである。

註1)「ユニット」の明確な定義はみられない。ここでは、施設内での生活が生活グループ毎に独立した空間で営まれる施設形態を指すこととする。2)職員へのヒアリングより。

参考文献1)デボラ・ラプトン著、無藤隆十佐藤恵理子訳：食べることの社会学、新曜社、1999 2)佐藤郁哉：定性データ分析入門、新曜社、2006 3)滝川一廣：愛着の障害とそのケア、そだちの科学

No. 7, pp. 11-17, 2006 4)山縣文治：子どもが「話す」ことと児童福祉施設での援助、季刊児童養護Vol. 32No. 2, pp. 19-21, 2007

表2. 会話カテゴリ<表層的>

	1. 作法	2. 健康と栄養	3. 食事に関する思いの共有	4. 集団生活の学び	5. 文化としての食事
大舎制	食べ方、姿勢、手の置き方等	食べることを促す、おかわりを促す等	食べた感想	年長児が年少児の面倒をみる	メニューの暗唱
小舎制ユニット			食べた感想	食事の交換交渉	食べ方、味付け、調理方法や盛りつけ
			調理した人	年長児から年少児の威圧	食材の知識
小舎制GH			食べた感想	食事の交換交渉	食べ方、食べ合わせや味付け
			食材にまつわる経験	会話の作法	献立の構成
			食事から想起されるメンバー		食材提供者への感謝

表3. A園における会話カテゴリ<深層的>

1. 身体	2. 家族	3. 生活グループ	4. 本体施設	5. 生活圏	6. 社会
体調		当日の出来事	物事の善悪	児童が起こした問題	通所児童が起こした問題
けが		職員の勤務	児童が起こした問題		
		メンバー	当日の予定		
			施設の行事		

表4. B園における会話カテゴリ<深層的>

1. 身体	2. 家族	3. 生活グループ	4. 本体施設	5. 生活圏	6. 社会
体調	児童の家族	当日の出来事	当日の出来事	学校生活	スポーツ
病氣・風邪	児童の家族	職員	当日の予定	先生	ニュース
	職員の家族	メンバーの習性や人柄	施設入所児童	友達	天気
		いないメンバーの想起	生活環境の整備	スポーツ少年団	その他一般的な知識
		ほしい物	思い出	買い物	
		生活環境の整備	施設の行事	児童相談所	
		職員間の連絡	翌日の予定	学校の行事	
		入浴	週末の予定		
		物事の善悪	児童の進路		
		メンバーの思い出	児童の進路とグループ替え		
		退所児童との思い出			
		職員の経験			
		児童の進路とグループ替え			
		将来になりたい職業			

表5. Cホームにおける会話カテゴリ<深層的>

1. 身体	2. 家族	3. 生活グループ	4. 本体施設	5. 生活圏	6. 社会
体調	児童の家族	当日の出来事	入所児童	学校生活	スポーツ
病氣	児童の保護者	職員のこと	職員	先生	住環境
髪の毛の特徴	児童の家族の思い出	メンバーの習性や人柄		友達	住むまちの地理
身体の特徴	職員の家族の思い出	夕食時の顔ぶれ		先生とのできごと	その他一般的な知識
身体の特徴		遊び		クラブ活動	天気や自然
		受験		職員との思い出	買い物
		教育的な話		学校の行事	
		職員間の連絡		買い物	
		その日の予定			
		メンバーの思い出			
		職員の経験			
		翌日の予定			
		週末の予定			
		進学			
		将来の進路			
		通所			

註)表3~5ともに、黒囲み文字は調査日以前の事、灰囲み文字は調査日以降のことを指す

\*1 早稲田大学人間科学学術院 助手・博士(工学)  
\*2 東北大学大学院工学研究科 教授・博士(工学)  
\*3 東北大学大学院工学研究科 助教・博士(工学)

\*1: Research Asso., School of Human Sciences, Waseda University, Dr.Eng.  
\*2: Prof., Graduate School of Engineering, Tohoku University, Dr.Eng.  
\*3: Assistant Prof., Graduate School of Engineering, Tohoku University, Dr.Eng.